

# 活字の力と子どもの学び

長野県新聞活用教育(N I E)推進協議会長  
信州大学学術研究院教育学系教授

松本 康



10年ほど前、こんなジョークを聞いた。「2カ国語を話せる人はバイリンガル。3カ国語はトリリンガル。では1カ国語しか話せない人を何というか？」1なのだから「モノリンガル」とつい答えてしまった。答えは「アメリカ人」なのだという。

最初にこれを聞いた時、アメリカ的価値観によってグローバル化された世界をアメリカの外から皮肉ったものと思ってニヤリとした。だがトランプ大統領のこの4年間に、これはジョークではなく事実であり、世界観の狭さを笑う、アメリカ人の自虐ギャグなのではないかと考えるようになった。

この4年間にアメリカから出てくるニュースは息苦しく、気持ち悪かった。多様性を認め合い、そこから合意を作ってゆく良き民主主義の伝統は後退し、陰謀論、単純化、嘘の反復、レッテル貼り、フェイクニュース、分断、排斥、果ては暴力がまかり通った。これらは控えめに見てもファシズムの特徴である。国のトップによる SNS のツイートから始まる政治的キャンペーンが既存のマスコミを揺るがし、国の品格を貶めた。だがこれはアメリカに限った話ではない。日本の SNS やマスコミにも、トランプイズムを支持する陰謀論者の言説は見られた。日本がかつて経験したファシズムは国家とマスコミ統制によるものだったが、SNS 経由の草の根ファシズムが今後の日本に起こらない保証はない。

今年1月の米大統領選挙の前後、ネット経由で Google 翻訳の助けを借りながら、今までで最も多くのアメリカの新聞サイトを読んだ。そこで感じたのは「新聞ジャーナリズムの良識は健在」だということだった。小さな新聞には怪しい主張もあったが、主要紙にはおおむねしっかりした事実報道や論説が書かれていた。アメリカの中学校では大統領選の間、政策のディベートがよく行われる。トランプ時代のアメリカの教師たちは新聞をどのように利用していたのだろうか、子どもたちはニュースをどのように読み解いていたのだろうか。少し気になっている。

TV や動画サイトや SNS に押されて、活字メディアの力は衰えているように見える。だが事実の正しさの検証と、因果関係、問題の本質の見極めのためには、やはり活字メディアの方が優れている。新聞は市民が事実の正しさやものごとの本質を見極めるためのツールである。新型コロナウイルスに振り回されたこの1年間、新聞の報道には命にかかわる情報を伝える切実感があった。新聞を使うから育てられるもの、新聞を読むからこそ見えてくるもの。これらをしっかり見すえて NIE の実践を行ってゆきたい。